令和６年度入学式　学長式辞

新入生の皆さん、県立広島大学の学部、専攻科、大学院への入学、誠におめでとうございます。この 3 年間、新型コロナウイルスのパンデミックにより、世界の人々は生活が大きく変化し、苦しんできました。皆さんも、高校生として、そして大学生として対面での教育を受けることができず、また、思うように学習や研究が進まず、大変辛い思いをされ、進学への不安もあったかと思いますが、そんな環境の中、見事に入学を果たされました皆さんの努力に対しまして敬意を表しますとともに、その志を支えて来られたご家族をはじめとした関係者の皆様に対し、心からお喜び申し上げます。

また、本日は年度はじめの慌ただしい時期にもかかわらずご列席を賜りました湯崎英彦（ゆざきひでひこ）広島県知事、中本隆志（なかもとたかし）広島県議会議長、北村冨美子（きたむらふみこ）県立広島大学同窓会会長、木山耕三（きやまこうぞう）庄原市長、岡田吉弘（おかだよしひろ）三原市長、谷川正芳（たにかわまさよし）大崎上島町長をはじめ多くのご来賓の皆様方に厚く御礼申し上げます。

＜どうぞ、ご着席ください＞

さて、ボーダレスに学べるデジタル時代に大学で学ぶとはどういうことでしょうか。大学は自分の好きなことができる場所です。必須科目はありますが、選択科目や研究、サークル活動など自由な活動ができます。もう一つは、一生の財産ともいえる友達を作れることです。自分とは違う性格や興味を持つ友達と一緒に過ごすことで刺激し合い、多様さを学ぶことができます。また、留学やインターンシップを 1、2 年してから、卒業研究に取り組めば、かなり充実したときを過ごせるかもしれません。専門性を高めるには、自分の好きなことを自分の選んだ分野でできるかどうかだと思います。授業以外にも大学のイベントやサークル活動で好きなことに出会えるかもしれません。キャンパスはそういうチャンスが転がっている場所なのです。まずはひるまず大胆に自分の目的を見つけることがすごく大事だと思います。大学を学生生活の最後だと思わず、社会へ挑戦するスタートだと思って入学してください。インターンシップやアルバイトでお金をもらう機会もあると思います。世の中を知り、世の中を考え、世の中を作り出すチャンスがキャンパスにはあります。

ところで、大学で多くの友人を作った一人に、岩波書店を興した岩波茂雄がいます。岩波茂雄は 1881 年 8 月 27 日長野県諏訪郡中州村で農家の長男として生まれました。父は温厚で方正な、文筆をよくする人で、母は村の婦人会をリードするほど活動的で気丈な女性でした。茂雄が１４歳の時、諏訪中学に入学しますが、その翌年享年３５歳で父がなくなります。中学卒業後、1899 に上京しました。1900 年に第一高等学校の受験に挑戦しますが失敗して、1901 年に合格しています。当時の一高は全寮制でした。1903 年 5 月、1 学年下の藤村操（ふじむらみさお）が「巌頭之感（がんとうのかん）」なる遺書を残し、華厳の滝に投身自殺したことに大きな衝撃を受けます。このころから、人生はいかに生きるべきかと深刻に悩むようになり、考える日々が続きました。学業がおろそかになり落第し、そして一高を中退します。しかし、再起して 1905 年に東京帝国大学哲学科に入学しました。茂雄は第一高等学校では、落第したり、中退したり、再入学したりして、人より長く行っていますが、そのおかげで多くの友人を得ています。中でも、当時第一高等学校の教師であり、作家としても売り出し中の夏目漱石が、自宅で開いていた木曜会によく顔を出していました。漱石を慕う若き作家たちや教員時代の教え子たちが「漱石山房」と呼ばれて

いた漱石宅に集まり交流を行っていたところです。この会への参加により、漱石門下生と呼ばれるようになり、そこには、阿部次郎、安部能成（あべよししげ）、和辻哲郎（わつじてつろう）、小宮豊隆（こみやとよたか）など、のちに作家となる友人たちがいました。茂雄は 1913 年 8 月 5 日に現在の神田神保町に古書販売を主な商いとする岩波書店を開き、翌年に一冊の本を出版しました。当時、朝日新聞で連載されていた夏目漱石の「こころ」です。しかも、夏目漱石が自ら費用を出した自費出版でした。本の装丁（そうてい）も漱石自身が手掛けており、箱、表紙、見返し、題字などことごとく漱石が行いました。漱石は自分を慕う若者たちへの面倒見はとてもよかったと、茂雄が自叙伝の中で述べています。また、学生時代に多くの友人が得られたことで、ほとんど無料で執筆してもらい、それが岩波文庫の基礎となっていると述べています。皆さんも、コロナ禍でほとんど取れなかったコミュニケーション力を生かして、できるだけ多くの友人を大学時代に作っていただきたいと思っています。

今日、私たちを取り巻く環境を見渡すと、私たちが解決しなければならない課題に満ち溢れています。世界的には、地球温暖化、国際紛争、貧困問題などがあり、国内に目を転じる と、自然災害の増加、少子高齢化、児童虐待など数え上げれば切りがないほどです。 そして、このような課題を解決するには一つの領域の学問だけでは解決しません。例えば少子高齢化を解決しようとした時に、皆さんはどのようなアプローチをするでしょうか。 医学の力が一番大切と主張される人もいれば、正確な情報把握のために統計学が必要という人もいるでしょう。そうではない、やはり雇用の確保が一番なので経済学の重要性を説く人もいます。また、社会学の役割を強調される人もいるでしょうし、文学や歴史の中にこそ 大切なヒントが隠されているという人もいるでしょう。 一つの正解があるわけではありませんが、強いて言えばすべての学問領域を総動員して 解決しなければならない問題であり、これは少子高齢化の問題に限ったことではありません。 このような時代にあって私たちが求められる能力とは、専門知をしっかり身につけ、異なる専門知をつなげたり融合したりできる総合知、そして専門知と総合知を実際に社会に役立てるために必要な他者と協働する力であり実践する力です。

私の好きな言葉に「上善如水（じょうぜんみずのごとし）」という老子の言葉があります。最も良い生き方とは、水のように柔軟な思考力を持ち、あらゆることにしなやかに対応しながら、学び、生きるという意味です。世の中は、社会は常に変化しています。あなた自身がこの 4 年間で水のように柔軟に変化する気持ちを持たなければなりません。幅広い体験から知識を使いこなす知恵を身に付けて、人間力を磨いてください。そして、自分のため、家族のため、未だ見ぬ未来のため、あなたの夢を実現させましょう。

本日は、県立広島大学への入学、誠におめでとうございます。教職員一同、心から歓迎いたします。

令和 6 年 4 月 5 日

県立広島大学

学長　森永　力